聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.190
2022.12.1

巻頭言
Greeting

× 小山田　格
Tadashi Oyamada
（単立・国際福音センター
東小金井チャペル牧師）

Profile

1948 年、東京生まれ。聖書神学舎 15 期卒業。現在、単立・国際福音センター東小金井チャペル牧師。

「主に従って来た道」

「あなたは、わたしに従いなさい。」
ヨハネ 21 章 22 節後半

この度、聖書宣教会の一般信徒向けの「聖書塾」が始まり、そこで教えるようにというお招きを受けました。以前にも信徒向けの講座で「聖書解釈学」を教えさせていただいたことがありますが、久し振りに母校で教える機会を与えていただき、一応自分の専門分野なので、とても嬉しく光栄に思いました。今回は、21 名の熱心な方々が申し込んでくださり、これまでに約半分を終えることができました。

私は、幼児の頃から教会学校に行くようになり、大学 3 年の時に東京国際基督教会の留学生たちに導かれて受洗し、4 年の時に献身に導かれ、1974 年に聖書神学舎（聖書宣教会）を卒業しました。神学校時代に主によって最も教えられたことは、「聖書は神のことばとして信じて読むものであり、またそのように信じてよいものなのだ」ということでした。その時以来、その教えがとても大きな助けになりました。また大学時代に献身を覚悟してから教えられたことは、「自分の思いを捨てて、主の御心に従う」ということでした。

神学校卒業後の私の歩みは、結構目まぐるしいものでした。その内容は主に、長年一つの働きを続けられた前任者の後を継いで、ある程度道を整え、次の若い方にバトンタッチをするということの連続でした。まず神学校卒業後は、母教会を離れて、JECA の川越聖書教会で牧会をしました【6 年間。5 年目に結婚】。次に米国留学に導かれ【3 年。旧約専攻】、米国にある二つの教会で留学生としてお世話になり、そこで留学生伝道のビジョンを与えられました。帰国後は、母教会の開拓である、筑波国際教会で牧会しましたが【約 3 年】、主に留学生が集う教会でした。その時にさらに大きな宣教のビジョンが与えられ、東京に戻り、妻と二人で国際福音センターを開拓しました【6 年】。思いがけず、日本聖契キリスト教団の目黒カベナント教会からお招きを受け、33 年間働かれた牧師の後を継いで牧会しました【6 年】。その後 40 年以上働かれた舟喜順一師の後を継いで、聖書同盟総主事となり【16 年。その間、同教団の久喜めぐみ教会協力牧師】、次に 55 年働かれた牧師の後を継いで、東京カベナント教会で牧会し【3 年】、最後は現在の、再度の開拓伝道【単立、6 年目】と歩んできました。新しい道に導かれたときは、「この働きは自分にはとてもできない。自分にはふさわしくない」と思うことがほとんどでしたが、自分の思いを十字架につけて、主の導きに思い切って従った時に、主はいつも必要な力を与えて下さいました。無我夢中で妻と共に、主に従って来たのですが、主は豊かな献身者の道を与えて下さったことを思い、心から感謝しています。

No.190 Topics

- p03　秋の恵み：オープンデイの風景
- p04-05　証：研修生、教会奉仕、奉仕教会の声
- p06　学びの窓
- p07　聖書学研究所から

キリストの愛と献身に応えて

伊藤 暢人
Nobuhito Ito
聖書神学舎 教務主任

キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。
（エペソ５：26-27）

学舎では

学舎では、夏期調整期間が明ける頃に数名の研修生が新型コロナ陽性となりました。しかし、広がることなく、オンラインを使うことで学びを中断することもなく、そして大事に至ることなくみな回復することができたのは、本当に幸いでした。家族寮の中では新しく生まれるいのちがあったり、あるいは調整期間中に結婚する研修生もいたりして、決して大人数とは言えないながらも、賑やかに楽しく研修に励んでいます。この後期からは聴講生に対するコロナ対応の制限をなくすこともできましたし、オープンデイや賛美礼拝も、オンラインを併用しつつも、外来者をお迎えして行えたことを感謝しています。

継続教育・拡大教育

年が明けてからは、新たな試みとして、卒業・修了生を対象としたオンラインによる継続教育クラスが始まります。また、みことばを読むことの喜びや楽しさをより多くの方々に知っていただきたいと願い、拡大教育「聖書神学舎デイ～公開講座」も催します（対面とオンライン）。ぜひご参加を、あるいは身近な人の参加を励ましていただけたらとお願い致します。

献身者の必要

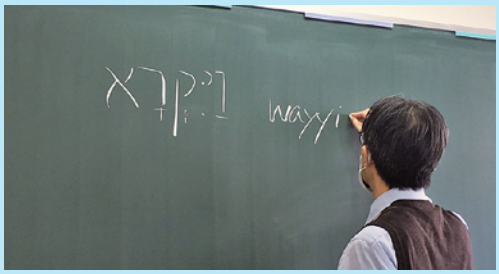
エペソ５章のいわゆる結婚に関する教えを学びながら、あらためて教会に対するキリストの深い愛と献身に感動を覚えています。キリストの愛と贖いの目的は、「花嫁」すなわち教会を聖化することであり、ついには非難されるべき所や汚点の全くない栄光の姿となった教会を「花婿」自らが自分の前に立たせることでした。最後まで愛しぬき、また、そこに至るまでもご自分の「からだの部分」として「養い育て」てくださる真実な恵みは、なんと偉大なことでしょうか（29-30 節）。

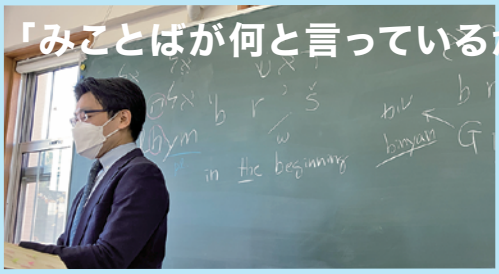
その偉大な愛に応えて、献身者が起こされ、学び舎に送られ、そして遣わされていかなければなりません。現代は戦争や疫病、あるいは異端の働きによる惑わしがあり、信仰を持つこと自体が警戒されるような時代です。しかしそのような中にあっても、来春の卒業・修了を予定している５名の研修生がいます。彼らが最後まで主の器としてふさわしく整えられていきますように、お祈りをお願い致します。一方で、宣教の現場がもっと多くの働き人を必要としている声も耳にします。先日も、来春異動の決まっている牧師が後任のことで困っていました。牧会者の高齢化も続けての課題です。教会を愛する主が私たちの国をあわれみ、献身者を起こしてくださるように、また、呼び出す声を聞いた人が信仰を持って応えてくることができるように、共に祈ってまいりましょう。

02 秋の行事から Open day 2022

3年ぶりに来会制限を設けないオープンデイを開催できました。11月5日に、来場者26名と、30名余のオンライン参加者を迎えて、授業見学と礼拝と交わりの半日を過ごしました。写真と来場者の「声」で、この日の風景をお知らせします。

チャペルでの説教がとても印象的。
先生方がとてもみことばを大切にされていたように思う。





「みことばが何と言っているか」に、こだわっていることに共感を覚えました。

学びも、音楽も、礼拝も、私にとっては全て恵みの時。

教会史は一年生の授業のため、概論という印象。新約・旧約釈義になると原語を扱って専門的な話がされていて驚いた。

先生方がとても楽しそうに講義していらっしゃる姿が印象的でした。

学舎外ではどのような実践的な学びがあるのか知りたいと思った。

祈りに始まり、祈りに終わることが、単なる学校ではないことを思わせるものでした。

03 研修生の証し
A Student's Testimony

みことばに聴くこと

菅野 雪
Yuki Kanno
聖書神学舎 本科3年

「寮生活に召されている。」そんな思いで、人生2回目の寮生活に臨んでいます。これは、某キリスト教大学の寮主事に言われて、ずっと心の片隅にあったことばです。もちろん、献身者としての召しは大前提として、まだまだ研がれる必要があって、今ここに置かれているという意味です。2回目の寮生活も2年半が過ぎましたが、また自分の一面に出会い、神の取り扱いを受けている最中です。未完成で、練られ途中の人々が集い、キリストにある一致を求めて、一つの共同体としての生活に取り組む。各々が神のみことばに聴き、それに応答し、変革されていかなければ成り立ちません。そのために、いかに神のみことばに聴くかが問われているように感じています。また、学びに関してもそうです。期末課題に取り組んでいる時、行き詰まって「しんどいな」と、同期の人にこぼすと、返ってきた一言にハッとさせられたことがありました。いつの間にか聖書を「勉強する」という感覚になり、「神のみことばに聴く」という姿勢から離れていたことに気づかされたからです。この学びは、神の声を聴くことから離れてはできない。していることは「勉強」ではあるけれど、私たちに語られた神のみことばを、特別に深く味わう貴重な経験をさせていただいているのだと。そんな気づきが、寮の交わりを通して与えられ、励まされながら学びに取り組んでいます。祈りに覚え、支えてくださっているみなさんに感謝しています。

21:30、チャペルで

田中 甲子郎
Koshiro Tanaka
聖書神学舎 本科2年

入会し、研修生活を送り始めて数か月たった頃、祈る時間は与えられていながらも、自分自身が神様との深い交わりの時間を持てていないことに気づきました。そこで私は、21:30にはチャペルで神様に心を開いて、顔と顔を合わせて祈るということを決めました。たいていの場合、課題等が終わっていませんが、時間になるといったんチャペルへ向かい、全館を施錠する22:00までの間、祈りに心を注ぎます。そこで神様が教えてくださったことは、「わたしはあなたの神である」ということです。夜のチャペルは真っ暗で、私のかけている眼鏡をはずせば目の前はぼんやりです。心がそのような気分の時があります。しかし確かなことは、今まで私を導き、これからも導いてくださる神様が、今この研修の場に私を置いてくださっていて、次のドアが開かれるまでの備えをさせてくださっていることです。この祈りの時を持って、私の研修生活はさらに豊かなものとなっています。

今年度、単身寮は男女合わせて7名で、人数的には少し大きな家族といったところであり、文字通り本当の家族でもあります。ここでも祈りで互いに仕えていて、執り成して祈っていただく時に、「私のことを分かってもらえている」と感じる瞬間があります。普段から祈り合う共同体であるからこそ感じることのできる恵みであると感謝しています。

04 教会奉仕の証し
In the Church

見て学ぶ貴重な機会に感謝しつつ

本多 卓也
Takuya Honda
聖書神学舎 本科4年

宣教会入会の説明の際に、「奉仕神学生というのは、特殊な立場ゆえの難しさもあるが特別な学びの時でもある」という言葉を頂きました。あれから３年半が経ち、振り返って見て、まさにその通りだと実感しています。所属教会以外のことをこれほどまでに体験的に知り、考えさせられ、祈らされ、学ばされる機会は、この先ないのではないかと思います。

毎年様々な恵みがありますが、今年奉仕させて頂いている十日市場めぐみキリスト教会では、主のみことばと聖霊様の働きを徹底的に重んじることの大切さを教えられています。人の指示によってではなく、みことばと聖霊様の促しによって各自が喜んで自発的に主にお献げすることの重要性が、説教で説かれ教会で実践されています。そのため、教会員の方々と奉仕をご一緒する際も、「みことばが大事ですから」という発言をよく耳にします。この様な姿を見るたびに、この教会がみことばの土台の上に堅く据えられていることを実感します。そして私が今、神学校でみことばの釈義を正確に行う訓練を受けている意味の大きさを見せつけられる機会ともなっています。神の御心が成し遂げられる教会を建て上げるため、残り半年の学びと奉仕に最善を尽くそうと思います。

05 奉仕教会の声
Voices from the Churches

トマス・ベック
Thomas Beck
十日市場めぐみキリスト教会 宣教師

今からちょうど10年前の９月14日に最初の家庭集会がもたれ、十日市場めぐみキリスト教会の歩みが始まりました。神様の恵みに心から感謝いたします。それから今日に至るまで、聖書宣教会から合計７名の神学生を派遣していただきました。そのご奉仕や証しを通して、神様ご自身が働き人を召してくださること、クリスチャンは教会の垣根を越えて「キリストのからだ」として一つになれること、また宣教の言葉には人間の能力や賜物に拠らない聖霊の働きがあることなど、私たちは多くを学ぶことができました。神学生の皆さんにとっても教会での交わりと奉仕が、みことばの務めに就くための良い備えとなることを願っています。

開拓伝道の働きには、福音の核心であるイエス・キリストの十字架を単刀直入に宣べ伝えることが必要不可欠です。教会を霊的に正しく健全に成長させるのは多くの催し物や緻密な宣教モデル、人の熱心ではありません。そうではなく、ただひたすら福音の威力と祈りの力に信頼することが必要です。教会がいつでも福音を中心に据え、心を一つに祈るとき、その働きは御心にかなって用いられ、教会は前進し続けるのです。かつての奉仕神学生の方々と今なお交わりを持つことによって、私たちが自分の教会の枠をはるかに越えて神様の働きに関わっていけることを心から嬉しく思います。

File No.022

「セックス、ジェンダー、セクシュアリティ」

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書神学舎 校長

掲題の三語を便宜上、生物学的な性、社会的な性、「自分らしさとしての性」とも言われると説明しておきますが、これらの用語、概念には歴史と揺らぎがあります。ともあれ、最近二つの地区同窓会で「伝道牧会の課題として」このテーマについて共に学んだ中から一部を簡潔に紹介します。

まず性分化疾患（DSD）について。DSD は「性染色体、性腺、内性器、外性器が非典型的である生まれつきの状態に使われる用語で、多くの疾患（体質）を含む総称」です。「LGBTQ の人々と混同されることが多いが、全く別のもの」で、両者の重複はわずかだとも言われます。しかし、生物学的な性別が判然としなければ、セクシュアリティが混乱するのは無理もありません。DSD であることが判明していない場合も含めて、この先天的な疾患に由来する混乱の可能性は排除できません。マタイ 19:12 の「独身者として生まれた人たち」（エウヌーコス・他では宦官と訳される）の中に DSD も含まれるでしょう。このような少数者の厳しい闘いと葛藤には、十分な理解と配慮が求められます。

一方、DSD 由来ではないセクシュアリティの混乱が衆目を集めています。その表れ方は LGBTQIXPA 等々、多様な表現をまといます。個人主義と相対主義をもって旨とする時代精神がそうした混乱を後押しして、多様性の主張は拡散の一途です。ですから、世界の創造主であり保持者である神の基準を聖書から正しく聞き取ることが不可欠です。

パウロの用語の選択に注目します。
「男色をする者」アルセノコイテース（1 コリ 6:9, 1 テモ 1:10）はパウロの造語のようですが、レビ記 20:13 に由来すると考えて間違いないでしょう。その 18 章と 20 章で繰り返される同性愛行為の禁止を前提として、それを思い出させたいという意図がパウロにあると考えられます。
ローマ 1:26.27 の用語の選択も意図的で、創世記の記事を指し示すと考えられます。一般的な男と女、アネールとギュネーという何十回も出てくる語ではなく、数例しか登場しない珍しいアルセーンとセーリュスを用いているからです。その数例のうちマタイ 19:4 とマルコ 10:6 は創 1:27(&5:2) の引用です。つまりパウロはこれらの語を用いることで、創造における男と女という明白な秩序を指し示し、「男」同士の性的関係、「女」同士の性的関係が「誤り」（欄外：あるいは「倒錯」）であると教えているのでしょう。

このように聖書は、旧新約を一貫して同性愛行為を禁じています。ソドムの罪についての理解や、「男娼」という訳語など、”伝統的”な読み方が不適当である部分は確かにあります。それでも、基準は明白です。

セクシュアリティ混乱の加速は時代の産物です。ジェンダーの多様性が受容され、歓迎されさえする時代です。人の発達にとって重要な役割を持つ、健康的なロールモデルが減少し、結果、一層の混乱を招くという悪循環に陥っているのではないでしょうか。その循環におもねるのでなく、創造主の基準を示すことが教会の務めです。すべての人が罪のために歪んでいるという事実、そのすべての人が救いに招かれているという事実を宣べ伝え、地に平和がもたらされ、神の国が広がるために、主の民が用いられますように。

対面での研究発表の恵み

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書学研究所 所長

昨年、『コロナ禍の中での研究』と題した記事の中で、世界の学者がオンラインでつながることの大切さについて書きました。しかし、オンライン学会には限界があることを痛感していました。そのような中、この夏、数年ぶりに参加したヨーロッパの学会で、世界の旧約聖書学者たちと共有できたことの恵みを少しお分かちしたいと思います。

わざわざ時間とお金をかけてまでして学会の開催地に出かけて行き、自分の研究発表をするのは、その場で、リアルタイムで、自分の発表に対する反応や感想やコメントをいただけるからです。また、自分が研究発表をしなくても、他の学者がどのようなコメントをし、それに発表者がどう答えるのかを知ることによっても、多くのことを学びます。

私は、一つのセッション（分科会）で、代理のチェアマンをするように依頼されました。その経験を通して学んだことは、若い研究者の発表を励まし、参加者に適切な質問を促すこと、熟練した学者の発表に対して、必要な場合自分が質問やコメントをすることが大切であることでした。

コーヒータイムの立ち話しの時のコメントも聞き逃せません。私が発表した時には何も発言しなかった学者が、その時に「よかったよ」と一言ボソリ。しばらく後に再び顔を合わせると、もう一言「私の本で引用されるはず」とボソリ。耳を疑ったのですが、どうやら好感を持って受けとめてくれたようだと感じました。「先生の前の発表者の時は居眠りをしていたけど、先生の発表には目を開いてよく聞いておられましたよ」と、その学者の隣で聞いていた、かつての私の教え子が知らせてくれました。

帰国後直ぐに論文に纏め、9 月始めにドイツの ZAW（旧約学会誌）に投稿しましたら、一ヶ月後に採用通知が来、来年の巻の第一号に掲載されるということでした。こんなに早く由緒ある学術雑誌に受け入れが決まることはまれです。早速、ヘブル大学のその学者にメールしましたら、正式に出版される前の原稿でもよいから早く見たいと言うことでした。

国際学会に出席する目的の大きな一つに、このような海外の学者から、リアルタイムでの評価とコメントを受け、自分の研究（「たこつぼ」に入ってするだけでは分からない）を吟味することができるという大きな利点があるのです。

研究所からの報告

1. 定例の研究会は、会員、準会員の研究経過報告の時を持っています。それ以外は、個人的な研究指導となります。
2 「ヘブル語聖書研究会」：5 月から、諸神学校・聖書学校の旧約担当の先生方と月一回、「マラキ書の釈義」をオンラインで行っています。遠隔地からの参加もあります。
3. 「ウガリト語研究会」：二年目に入りました。月に一回、ウガリト語テキストを読んでいます。こちらもオンラインで、アメリカやアイルランドからの参加もあります。
4. ［出版助成］津村俊夫著『聖書ヘブル詩の並行法～詩行の反復表現が表すもの～』（ひつじ書房、2022 年）定価 4800+ 税。11 月発売予定。出版助成により定価を下げることができました。

聖書宣教会通信 No.190 発行者：末松 隆太郎 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 http://www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

教師、講師の証

学びの恵み

馬場 義実
Yoshimi Baba
聖書神学舎 講師

大学４年時にバッハ研究の授業の中でヨハネ受難曲について学んでいましたが、残念なことに聖書をテキストとして作られた作品に対して、聖書から遠のくような講義を先生から聞かされ私はショックを受けました。その頃、岳藤豪希師と出会い、師の指揮指導されていたエヴァンゲリウム・カントライに入団し、日本語でのヨハネ受難曲の合唱を歌う機会が与えられました。イエス・キリストが私のために十字架にかかって苦しまれたことが心に迫り、私も主に従わせてくださいと願いました。

大学卒業後に教会音楽舎に入会し、足りない者にも関わらず教会音楽の多くの学びを受けさせていただきました。卒業後12年間主に従う使命からずれるような歩みの中で、もう一度主に従う者とさせていただきたく聖書科に入会し、聖書の学びに集中させていただきました。

教会音楽は、音楽の知識や技術だけでなく、信仰と共に聖書から学ぶ教会音楽についての知識も大切です。教会で教会音楽の奉仕をされる方々に是非少しでも学びの機会が与えられ、主への賛美が豊かになるように祈っています。

あなたがたがわたしを選んだのではない

須田 松子
Shoko Suda
聖書神学舎 講師

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」　（ヨハネ15:16）

昨年度より、声楽の担当をさせて頂き、私自身も学びつつ指導しています。

私の実家は、伯母が長唄師匠で、父は唄い、母と私は三味線を弾くという、和風で、キリスト教とは無縁の家庭でした。しかし、母の受洗をきっかけに、私は教会へ行くようになり、20歳の時、上記のみことばを与えられ、受洗しました。それから程なくして、父や伯母も受洗の恵みに与りました。或る日、伯母が、実は大叔母が熱心なクリスチャンだったこと、又、伯母自身も若い頃、教会に通うことを願うも、戦後家族を支える忙しさゆえ断念したことを、私に話してくれました。家族の救いを一番に願っていた母の切なる祈りが聞かれ、家庭に恵みが広がったことを思いました。

振り返ると、私が自分で選んできたと思っていた道のりは全て神様のご計画の内にあり、あわれみ豊かな神様の一方的な愛により、真理の道に導かれたのでした。
「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
引き続き、未信者の家族の救いの為に祈っていきたいです。

近況と祈りの課題

- □ 岳藤照子先生が11月9日に地上の生涯を終えて、主のみもとに移されました。
- □ 研修生、教職員一同の霊肉の健康のため、特に来春の卒業予定者5名のために。
- □ 経済の必要のために。コロナ禍を越えて活動が拡充し、電気料金等々の値上が加わり、厳しい財務状況です。諸教会の経済も主がお支えくださいますように。

お知らせ：聖書神学舎デイ＆教会音楽一日講習会

- □ 2023年3月18日に、聖書神学舎デイとして、学舎の味わいを皆様にお届けします。横浜山手キリスト教会を会場に。詳細は学舎 WEBサイトをご覧ください。
- □ 2023年3月25日には教会音楽一日講習会を行います。夏期講習会をコロナ第七波に対応して中止しましたが、学びの機会を願う皆様のために企画しました。案内・申し込み書をWEBサイトでご確認ください。是非、羽村の学舎にお出かけください。